

焦点と結び付く二つの副詞tooとalso

Two Focus-Linked Adverbs, *too* and *also*

舘 清 隆

1. はじめに

本論の目的は焦点と結び付く二つの副詞である *too* と *also* が作り出す焦点とそれに伴う前提の機能を語用論的観点から議論し、それらがどのような点で他の種類の焦点とそれに伴う前提とは異なるかを明らかにすることである。さらに、*too* と *also* が結び付く焦点の範囲が文全体に及び、その結果前提を担う部分が文からなくなった場合に、談話の自然な流れがどのように保証されるかについても考察を加える。

本論に入る前に、前提という概念を基本的にどのように把握するかをまず示すことにする。Jackendoff (1972) の議論に従えば、前提には例えば定性 (definiteness) や叙実性 (factivity) などの特性を持つ語彙項目がもたらす「内在的前提」(inherent presupposition) と、焦点との関連で定義される「焦点に対する前提」(focal presupposition) の二種類がある。この二つは、語用論の観点から見ると、かなり異なった振る舞いを示す。⁽¹⁾ また、焦点と「焦点に対する前提」に話を限った場合にも、英語には焦点を作り出すためのいくつかの装置がある。さらに、このようにして指定される焦点の語用論的機能にはいくつかの分類が可能であり、焦点の機能が異なれば、それに対応する前提の機能にも違いが予想される。⁽²⁾

2. 焦点と前提

焦点を作り出す装置としては、次の三種類を挙げることができる。なお、以下の例ではイタリック体で焦点を、大文字で主強勢を示すことにする。⁽³⁾

(i) 主強勢

I met *JOHN* in the park.

(ii) 構文がもたらす焦点 (structural focus) ⁽⁴⁾

It was *a brand fur new coat* that John bought for his wife.

What John bought for his wife was *a brand new fur coat*.

John bought for his wife *a brand new fur coat*.

Into the room walked *John*.

Under the table was *a cat*.

(Rochemont and Culicover (1990: 24–28))

(iii) only, even, just, too, also などの語彙項目の作用域

I will write a letter *only to Marie*.

I will write a letter *even to Marie*.

I will write a letter *just to Marie*.

I will write a letter *to Marie* too.

I will write a letter *also to Marie*.

(Ross and Cooper (1972))

このようにして作り出される焦点を語用論の観点から分類することは、単に分類のための分類を行おうというわけではない。焦点の機能の語用論の分類が、本論で展開する too と also に関する議論を別にしても、経験的な意味と動機付けを持つことを指摘しておきたい。Chomsky (1971, 199) は (1) のような例を挙げ、分裂文においてその焦点以外の位置に強勢が置かれることがあると論じている。

(1) a. Is it John who WRITES poetry ?

b. Is it John who writes POETRY ?

例 (1a) では、分裂文が作り出した焦点である John に加えて、writes が対照強勢が作り出した焦点として存在する。焦点と前提の関係を整理すると次のようになる。

分裂文に基づく焦点: John

分裂文に基づく前提: X writes Poetry

対照強勢に基づく焦点：writes

対照強勢に基づく前提：John does X to poetry

焦点と前提をそれぞれ新情報と旧情報とに色分けをすることだけで済まそうとすれば、分裂文の定義する旧情報 X writes poetry の中に対照強勢がもたらす新情報 poetry が存在するだけでなく、対照強勢が定義する旧情報 John does X to poetry の中には分裂文がもたらす新情報 John が存在することになる。ほぼ同様の分析が (1b) に対しても行なわれることになる。このような分析は、(1a) と (1b) がそれぞれ二重の矛盾を含んでいて、非文であると予測してしまうはずであるが、この予測はもちろん正しくない。この問題を解決するためには、分裂文が作り出す焦点と前提とは別の特徴付けを対照強勢が作り出す焦点と前提に対して行うことがまず必要となるはずである。

本論では議論の出発点として、Dik, *et al.* (1981) による焦点の機能に関する語用論的分類を採用する。Dik, *et al.* (1981, 60–68) は次のような例を基に、焦点の機能を六種類に分類している。ここでもまた、イタリック体を当該の焦点を示すのに用いる。

i>

(i) 補完的 (completive) 焦点：聞き手の情報の欠如を補う。

A : What did you buy?

B : I bought *coffee*.

(ii) 選択的 (selective) 焦点：選択肢の中からの選択

A : Did you buy tea or coffee?

B : I bought *coffee*.

(iii) 拡張的 (expanding) 焦点：項目の追加

A : He bought coffee.

B : But he also bought *rice*.

(iv) 制限的 (restrictive) 焦点：項目の制限

A : Did he buy coffee and rice?

B : No, he only bought *rice*.

(v) 置換的 (replacing) 焦点：項目の置き換え

A : John went to New York.

B: No, he went to *London*.

(vi) 並列的 (parallel) 焦点: 対になった項目の列挙

A: Who bought what?

B: *Tom* bought a car and *John* a bike.

焦点に関する一般的議論のためには、以上のような機能の分類に加えて、焦点に対して次の二つの特徴を想定することが必要となるであろう。(1) 先の例(1)と並列的焦点の例(iv)などが示すように、単一文に複数の焦点が生ずることができる。(2) 例えば Kaplan (1984, 511) の指摘する例(2)が示すように、一つの焦点が複数の機能を果たすことができる。具体的に言えば、(2)をモーは魚の他にスープも食べたと解釈する場合に、最初の三つの焦点は単なる並列的焦点であるが、最後の *soup* は並列的焦点であると同時に拡張的焦点である。⁽⁵⁾

(2) a. (?/*) *Joe* had *fish* and *Mo* had *soup* too.

b. (?/*) *Joe* had *fish* and *Mo* had *soup* also.

次に、too と also が結び付いた拡張的焦点とその前提について、その特徴を検討することにする。まず、補完的焦点と too と also が結び付いた拡張的焦点の違いを明らかにするために、次のような談話を指摘したい。ある教師が生徒の好きな教科と好きな食べ物の間の相関について興味が湧き、生徒の一人に尋ねたとしよう。

(3) Which subject and what food do you like?

(4) a. I like *math* and *fruits*.

b. ?? I like *math* and *fruits* too.

c. ?? I like *math* and also *fruits*.

このような環境で too や also を用いることは、(4b) や (4c) が示すようにほぼ不可能である。(4a) - (4c) において焦点がどのような機能を果しているのかは次のように整理することができる。(4a) では *math* と *fruits* は共に単なる補完的焦点であると考えることができる。これに対して、(4b) と (4c) においては、*math* は (4a) の場合と同様に補完的機能のみを持つが、too や also の生起は *fruits* が補完的機能に加えて拡張的機能を果たすことを要求している。

同じ環境で too や also が生ずることのできる例を作り出そうとすると、(5) のようになる。

(5)a. I like *math* and *music* too.

b. I like *math* and also *music*.

もちろん、これでは教師の質問に対する生徒の返答としては不完全であり、(6) のような主旨の文を生徒はすぐさま追加しなければならない。

(6) And my favorite food is fruits.

これらの例から次のことが分かる。(4a) のように補完的焦点が繰り返される場合には、二つの焦点は教科と食べ物別の類から選び出すことができるが、(5a) と (5b) のように too や also が結び付くことで拡張的機能を果たすことになった焦点は、先行する焦点と同じ類から選ばなければならない。もう少し一般的な述べ方をして、次のような条件を拡張的焦点に課することができるように思われる。

(7) 拡張的焦点に関する条件⁽⁶⁾

補完的焦点の後ろに too や also の結び付いた拡張的焦点が続く場合には、補完的焦点が二つ併記される場合に比べて、二つの焦点は概念的により制限された同一の類に属さなければならない。

条件(7)がより複雑な例に対してどのような帰結をもたらすかについては、第3節で詳細に検討することにして、次に、拡張的焦点に対応する前提について考察する。

先に議論した(4)の例では、縮約操作(reduction)が適用することで、前提の部分が消去されていると見なすことができる。拡張的焦点に対応する前提の機能を検討するために、縮約された部分を補って文を考えてみよう。

(8)a. I like *math* and I like *music* too.

b. I like *math* and I also like *music*.

例(8a)と(8b)では、andに後続する部分において、*music*が拡張的焦点であり、I like Xが拡張的焦点に対する前提となる。この前提は先行する表現、つまりandに先行する部分にそのまま現れている。このように焦点に対する前提が先行する表現を単に繰り返しているだけであるような状況は、拡張的焦

点以外の焦点にも一般的に見られる。この節の最初で六種類の焦点を例示するのに用いた例(i)–(vi)では、話し手Bの発話の中で前提を表すとされる部分は、ほぼそのままの形で既に話し手Aの発話の中に生じている。

このような素朴な状況に加えて、拡張的焦点に対する前提の場合には、Green (1968) が指摘する例(9)、(10)のような複雑な状況が観察される。例(9)はバーブもウェンディも共に17才となり、自動車免許を取得できると判断されるような状況での発話であり、(10)は例えば、父親に息子がお金と(車の)鍵を借りることが必要となるだろうと述べているような発話である。

(9) a. Barb is seventeen, and Wendy is old enough to have a driver's license too. (Green (1968:24))

b. Barb is seventeen, and Wendy is also old enough to have a driver's license.

(10) a. I wouldn't have any money, and you'd have to lend me *your key* too. (Green (1968:22))

b. I wouldn't have any money, and you'd also have to lend me *your key*.

(9)ではWendyが拡張的焦点であり、それに後続する部分X is old enough to have a driver's licenseが前提を表わす部分である。同様に、(10)ではyour keyが拡張的焦点であり、それに先行する部分you'd have to lend me Xが前提を表す部分である。しかし、これらの前提は、(8)の場合とは違って、先行する部分にそのままの形で現れてはいない。

ここで注目しなければならないのは、17才になると運転免許が取れる状況においてのみ、(9)は一貫した談話を構成できるということである。同様に、例えば親子あるいは夫婦の関係のように、お金がないと言えば貸してもらえるような状況においてのみ、(10)は意味を持つ。拡張的焦点に対する前提の例である(9)と(10)では、andに先行する部分で含意(imply)されている内容が、andに後続する部分で前提として受け継がれていることになる。⁽⁷⁾ このことから、次の(11)を拡張的焦点に対する前提の特質として仮定することができる。

(11) 拡張的焦点に対する前提の特性⁽⁸⁾

先行する文の含意を、後続する文において、too や also の結び付いた
 拡張的焦点に対する前提とすることができる。

拡張的焦点に対する前提は、先行する談話の含意の中に潜んでいることがある
 ことを見てきたわけであるが、この点を見失うと、次節で試みるように、特定
 の文の焦点と前提の範囲を判断しようとする際に、間違った査定をしてしまう
 危険性が生ずる。

3. too と also の作用域 (scope) と焦点の幅 (focal range)

この節では too と also の統語的分布から議論を始め、too と also が結び付く
 拡張的焦点が文の中でどの範囲にまで広がるかを考察する。そして、
 拡張的焦点が文全体に及んだ時に、文がどのような意味的特徴を示すかを
 検討する。

まず最初に too と also が名詞句と結びついた例として、(12) – (13) と (14) –
 (15) の連続する談話を考えてみよう。これらの例は Ross and Cooper (1979)
 の指摘する例を本稿の議論の目的に合わせて整理したものである。also は拡張
 的焦点として機能する主語名詞句や目的語名詞句に先行することも後続するこ
 ともできるが、too は拡張的焦点に後続することしかできないことが、例 (12)
 – (15) から分かる。

(12) Were only the Dobbases sending eggs to Marie ?

(13) a. No, *too / also Pillings were sending eggs to Marie.

b. No, Pillings (?) too / also were sending eggs to Marie.

(Ross and Cooper (1979: 369))

(14) Were they sending only eggs to Marie?

(15) a. No, they were sending *too / ? also bananas to Marie.⁽⁹⁾

b. No, they were sending bananas too / (?) also to Marie.

(Ross and Cooper (1979: 370))

同じことが動詞を拡張的焦点とする場合にも成り立つことを示すために、(16)
 – (17)を追加することが可能である。

(16) Is John only fixing the fence ?

(17) a. No, he is *too / also *painting* it.

b. No, he is *painting* *too / *also it.⁽¹⁰⁾

例 (12) - (17) では too と also が拡張的焦点に隣接して生じていたが、次に拡張的焦点から離れた位置に生じた too や also が拡張的焦点とどのように結び付くかを検討する。以下の例 (18) - (23) は Ross and Cooper (1972) の議論する例を本論の目的に合わせて一部手を加え、母国語話者に文法性に関する判断を求めて準備した。まず、連続する談話 (18) - (19) は、文頭に too と also を固定した上で拡張的焦点を主語 (19a)、主動詞 (19b)、目的語 (19c) へと移動させた例である。

(18) John has written a paper.

(19) a. *Too / (?) Also *Tom* has written a paper.⁽¹¹⁾

b. *Too / (?) Also John has *posted* it.

c. *Too / (?) Also Tom has written *a book*.

本論では作用域 (scope) と焦点の幅 (focal range) の二つの術語を基本的には Culicover and Rochemont (1983) に従って、次のように使い分けることにする。⁽¹²⁾ 作用域という概念は副詞 too と also に関して用い、(19) では文頭にある also の作用域が文全体に及んでいると言うことにする。なぜなら、文頭に also があれば、その文のどの要素も拡張的焦点になり得るからである。もちろん、文頭の too にはそのような作用域の広がりはない。一方、焦点の幅は (19a) では主語名詞句に、(19b) では主動詞に、(19c) では目的語名詞句に広がっているということにする。

(20) - (21) の連続する談話は too と also を助動詞の位置に固定した例であり、(22) - (23) の談話は too と also を文末に固定した例である。

(20) John has written a paper.

(21) a. *Tom* has *too / also written a paper.

b. John *too / also has *posted* it.

c. John *too / also has written *a book*.

(22) John has written a paper.

(23) a. *Tom* has written a paper too / (?) also.

b. John has *posted* it too / (?) also.

c. John has written *a book* too / (?) also.

これらの例を総合すると、too は文末に置かれた場合にのみ、その作用域を文全体に及ぼすことができるが、also は文頭、助動詞の位置、文末のいずれにおいても、その作用域を文全体に及ぼすことができることになる。例(19)、(21)(23)では副詞 too や also の作用域は文全体に及んでいるが、拡張的焦点の幅は主語名詞句、主動詞、目的語名詞句など文の一部にとどまっている。次に、作用域がこのように文全体に及んでいる場合には、拡張的焦点の幅も文全体に広がるのが可能であることを議論し、文全体に幅を広げた拡張的焦点の語用論機能について検討する。

まず、パーティに来なかった理由を尋ねている状況での次のような談話(24)－(25)を考えてみよう。なおこれ以降はイタリック体は当該の拡張的焦点のみを表す。

(24) Why didn't you come?

(25) a. I had a cold and *too / (?) also *the roads were flooded*.

b. I had a cold and *the roads were* *too / also *flooded*.

c. I had a cold and *the roads were flooded* too / (?) also.

副詞 too と also がその作用域を文全体に及ぼすことのできる位置に生ずれば、作用域全体に拡張的焦点の幅も広がるのが可能であることを(25a)－(25c)は示している。同様に、ある特定の暴風雨から町がどのような被害を受けたかを報告した文として例(26)を考えてみよう。

(26) a. The houses were destroyed, and *too / (?) also *the roads were flooded*.

b. The houses were destroyed, and *the roads were* *too / also *flooded*.

c. The houses were destroyed, and *the roads were flooded* too / (?) also.

ここでも、副詞の作用域が文全体に及んでいる場合には、拡張的焦点の幅も文全体に広がるのができることが分かる。

先に拡張的焦点に対する前提の特異性(11)を提案するために論じた例(9)－(10)と、今論じた(25)－(26)とでは、拡張的焦点の幅が大きく異なることに注

意しなければならない。つまり例(9)－(10)では名詞句だけが拡張的焦点として機能していたのに対し、(25)－(26)では節全体が拡張的焦点として機能している。接続詞 *and* に後続する部分に、*and* に先行する部分が繰り返されていないという見かけ上の類似性の下に本質的違いが隠れている。したがって拡張的焦点が節全体に及んだ場合に関する以下の議論は、当然(9)－(10)には適用されないことになる。

拡張的焦点の幅が *and* に後続する節全体に広がることにより、(25)と(26)のような例では、焦点に対する前提が存在しないことになる。このような場合でも、拡張的焦点に課された条件(7)が正しく機能していることを、次に示すことにする。補完的焦点が二つ連続する場合と比較して、より制限された同一の類に属さなければならないことを条件(7)は要求する。次の(27)は Lakoff (1971, 127) が論ずる非対称的 (asymmetric) 用法の *and* を含んでいる例に *too* と *also* を加えたものであるが、非文である。このような環境では、*and* に後続する節全体を拡張的焦点とすることはできない。これは、*and* に先行する部分とそれに後続する部分が、原因と結果という別の役割を演じているため、条件(7)を当然満たさないからである。

(27) A: What happened?

B: * The police came into the room and (also) *everyone* (also) *swallowed their cigarettes* (too / also) .

先に論じた例(25)と(26)は共に対称的 (symmetric) *and* を含んでいたと解釈される。しかし、対称的 *and* を含んでいると Lakoff (1971, 127) が論ずる例の一つである(28)に *too* や *also* を付加し、*and* に後続する節全体を拡張的焦点として用いることは不可能である。このことから、*and* の対称性だけでは、条件(7)が満たされたことにはならないことが分かる。

(28) A: What is going on?

B: * Mary is eating toast and (also) Fred is (also) *chasing the aardvark* (too / also) .

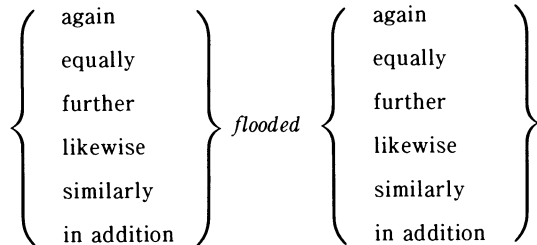
容認不可能である(28)が、独立した別個の状況を、その事実に特定の解釈を与えないまま、羅列しているだけであるのに対して、(25)では *and* に先行する

部分と後続する部分で述べられた二つの事実は、共に、出席できなかった理由と解釈されている。また、(26)では and の前後の節で示された事実は、共に、ある町の被害が甚大であった証拠としての解釈が与えられている。つまり、容認可能である (25) と (26) のいずれにおいても、and の前後の二つの節が (28) と比較してより制限された一つの類に属していることになる。⁽¹³⁾

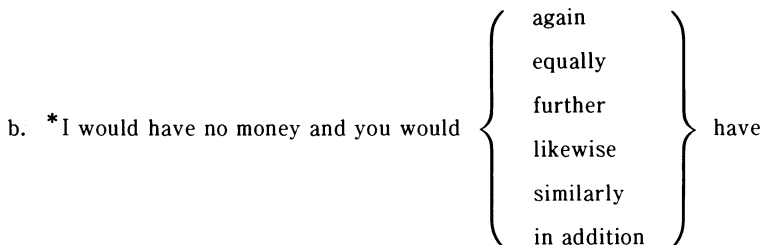
最後に、too と also に関して本論で議論してきたことが、拡張的焦点と結び付く他の語彙項目、例えば Quirk, *et al.* (1985, 604) が追加的下接詞 (additive subjunct) と呼ぶ類全体に成り立つかどうかについて触れておく。結論を先に述べるならば、適用範囲をこの類全体に直ちに拡張することは、不可能のようである。too と also に分布と意味が類似している as well, even, again, equally, further, likewise, similarly, in addition に限って議論し、either, neither, nor は考慮外に置くが、文全体に焦点の幅が広がった例に対する条件 (7) の主張と拡張的焦点に対する前提の特性 (11) の守備範囲は as well と even まではしか拡張できないことを (29) – (30) は示している。

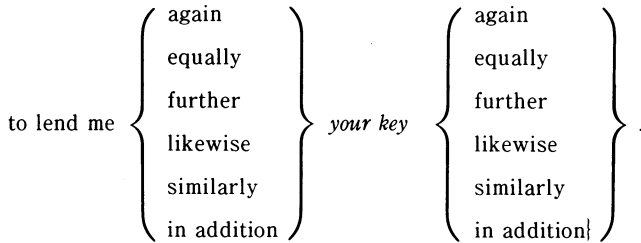
(29) a. I had a cold and *the roads were* (*as well / even) *flooded* (as well / ? even).

b. *I had a cold and *the roads were*



(30) a. I would have no money and you would (*as well/ even) have to lend me (*as well/ even) *your key* (as well/ ? even).





(29b) (30b) で用いられている追加的下接詞が、拡張的焦点の標識であるだけでなく、それぞれ固有の意味を色濃く持つことが、これらの文を非文としている理由の一つとして考えられる。

4. 結論

本論では、副詞 *too* と *also* が結び付く焦点と、それに対する前提の機能を、語用論的観点から議論した。そして、*too* と *also* が結び付いた拡張的焦点の特徴として条件(7)を提案した。また、対応する前提の特性として、(11)を仮定した。さらに、*too* と *also* の作用域の広がりを検討し、作用域が文全体に及ぶ時には、焦点の幅も文全体に広がることを可能であることを指摘した。そして文全体が拡張的焦点になる場合にも、条件(7)が適用することを示した。

注

- (1) 内在的前提の場合には、焦点に対する前提とは違って、旧情報という特徴付けが全く不可能である。この点の詳細については、館 (1976) を参照。
- (2) 例えば、分裂文が作り出す焦点とその前提と、疑似分裂文が作り出す焦点とその前提の間の語用論的違いについては、Prince (1978) を参照。
- (3) (ii) – (iii) のように主強勢以外の装置が焦点を作り出す場合には、文の主強勢が置かれる位置を、混乱を避けるために表示しないことにする。(ii) – (iii) で指定された焦点の位置には強勢が置かれるのが普通ではあるが、常にそうであるわけではない。例えば分裂文と強勢の関連については、以下の例(1)に関する議論を参照。
- (4) 構文がもたらす焦点 (structural focus) という用語は Rochemont and Culicover (1990, 24) による。

- (5) (2a) と (2b) の容認可能性の判断には、母国語話者の間でばらつきが見られる。Kaplan (1984, 511) とこの例文を Kaplan に対して個人的談話の中で指摘した Green は共に also を用いた (2b) は容認可能であるが、too を用いた (2a) は容認不可能であるとしている。これに対して、筆者がインフォーマントとして容認可能性の判断を依頼した五名の母国語話者のうち三名は、too を用いた (2a) の方が also を用いた (2b) よりも容認可能性が高いとしている。あとの二名はどちらも容認不可能と判断している。この例は too と also の相違点を論ずるのに一見興味深いものであるが、このようなばらつきを予測してくれるか、あるいは、それと連動するような他の事実が見あたらないので、この問題をここでこれ以上議論することはない。
- (6) Kaplan (1984, 514) は too に対して、対比される構成素間の類似性を強調する (to emphasize the similarity between contrasting constituents) という談話上の機能を提案している。しかしそこでは、このことを示す十分な論拠が提出されているとは言えないようである。また、「強調する」という Kaplan の述べ方は適当ではなく、本論の(7)で示したように、より制限された類に属さなければ「ならない」というのがより適切な主張であろう。
- (7) Kaplan (1984, 511) は本論で例(9)と(10)に関して述べたこととはほぼ同じ観察をした上で、too の言語慣習的含意 (conventional implicature) として次のような主旨の提案をしている。話し手が第二番目の節の焦点に対して述べたことを、最初の節の焦点に対しても述べるのが too の含意である。本論では、too や also が結び付いた拡張的焦点に対する前提の特異性として、この問題を考えることにする。
- (8) これが拡張的焦点に対する前提のみに言えることなのか、それとも他の種類の焦点に対する前提にもほぼ同じようなことが言えるのかは、慎重に議論する必要がある。例えば、補完的焦点を含んだ例(i)の容認可能性がきわめて低いことから、話し手 A の含意を前提として引き継ぐことはできない、と考えられる。しかしながら、問と答で述部を入れ換えると、(ii)が示すように容認可能性は高まる。
- (i) A: Who is seventeen?
B: ?? *John* is old enough to have a driver's license.
- (ii) A: Who is old enough to have a driver's license?
B: *John* is seventeen.
- これらに関する問題は本論では未決着のまま残しておく。
- (9) 主動詞と後続する目的語の間に too や also の生じた例の文法性は、この位置に要素が侵入するのも阻止する一般的制約が存在するために、低くなる。この点に関する

詳細は、例えば Postal (1974, 135) を参照。

(10) (17b) の文法性が低い理由については注(9)を参照。

(11) Ross and Cooper (1972) は文頭に置かれた also を容認可能としているが、文頭の also は容認可能性が低く、この位置の also 後には休止 (pause) が必要であると判断する母国語話者もいる。休止付きの also と too については、本論では議論しない。

(12) 本論での焦点の幅という術語の使い方と、Culicover and Rochemont (1983) のそれとには、若干の違いがある。本論では個々の焦点の広がりそのものを指すのに対して、Culicover and Rochemont (1983, 150) は、ある文に可能な焦点の広がり集合を指すのに用いている。文末に主強勢のある次の例(i)では(ii)のイタリック体で書かれた要素の集合が彼らの言う‘focal range’である。

(i) John gave the ice cream to the old MAN.

(ii) *man, old man, the old man, gave the ice cream to the old man, John gave the ice cream to the old man*

(13) レレバンス理論が too と also に対して仮定する平行処理という概念は、節全体に拡張的焦点が広がった場合に条件(7)が節に要求する解釈とかなり近いものになる。平行処理については Blass (1990, 136–160) および東森 (1992) を参照。ところが拡張的焦点の幅が名詞句や動詞のような局所的部分にとどまる場合には、条件(7)と平行処理の概念はかなり違った主張をする。細かな議論は控えるが、後者の場合まで含めて一貫して平行処理を主張するのは、無理であろうと思われる。

参考文献

- Blass, R. (1990) *Relevance Relations in Discourse*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Chomsky, N. (1971) “Deep Structure, Surface Structure, and Semantic Interpretations,” in D. Steinberg and L. Jakobovits, eds., *Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics, and Psychology*, 183–216, Cambridge University Press, Cambridge.
- Culicover, P. W. and M. Rochemont (1983) “Stress and Focus in English,” *Language* 59, 123–165.
- Dik, S., et al. (1981) “On the Typology of Focus Phenomena,” in T. Hoekstra, et al. eds., *Perspectives on Functional Grammar*, 41–74, Foris, Dordrecht.
- Green, G. M. (1968) “On too and either, and not just too and either, either,” *CLS* 4, 22–39.
- 東森勲 (1982) 「Too と Also の認知的メカニズム」『英語青年』138, 23.

- Jackendoff, R. S. (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Kaplan, J. (1984) "Obligatory *too* in English," *Language* 60, 510–518.
- Lakoff, R. (1971) "If's, And's, and But's about conjunction," in C. J. Fillmore and D. T. Langendoen, eds., *Studies in Linguistic Semantics*, 115–150, Holt, Rinehart and Winston, New York.
- Postal, P. M. (1974) *On Raising*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Prince, E. (1978) "A Comparison of *wh*-clefts and *it*-clefts in Discourse," *Language* 54, 883–906.
- Quirk, R. et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman, London and New York.
- Rochmont, M. S. and P. W. Culicover (1990) *English Focus Constructions and the Theory of Grammar*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Ross, J. R. and W. E. Cooper (1979) "Like Syntax," in W. E. Cooper and E. G. T. Walker, eds., *Sentence Processing*, 343–418 Lawrence Erlbaum, New Jersey.
- 舘清隆 (1976) 「焦点に対する前提と内在的前提の相違点について」『英語学』15, 65–76.

